

開会挨拶

2006年10月27日

金児 暁嗣

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました大阪市立大学学長の金児（かねこ）でございます。本日は、私どもの国際シンポジウムにたくさんの方々にお運びいただきまして、誠にありがとうございます。大阪市立大学国際学術シンポジウムは毎年開催されております。今回で14回目になりますが、今年は幸い、駐日欧州委員会代表部の全面的なご協力を得まして、特に大規模かつ内容の充実したものとすることができました。

本学は、1880年の大阪商業講習所の開所を起源といたしまして、126年の歴史を有する我が国最古の市立大学ですが、特に金融界、財界には多くの人材を輩出して参りました。本日の第2セッションには、ヨーロッパを代表する金融機関でありますドイチェ・バンクの高名なエコノミストでいらっしゃいますノルベルト・ヴァルターさんにおいでいただいておりますが、我が国の金融機関で世界的に最も知られております野村證券の創業者である野村徳七氏は本学の卒業生であります。

ところで本学は、今年4月から公立大学法人として、新しく船出をいたしました。今年の本学国際シンポジウムが、大学の新たなスタートを切る年にふさわしい盛大なものとなりましたことを大変喜ばしく思っております。今回の企画は、「ヨーロッパに学ぶアジア地域統合の可能性」ということですが、実は本学は、これまでフランスとともに欧州統合の推進に中心的な役割を果たしてきましたドイツと、歴史的に深いつながりを持っております。そのことを少しばかりお話しさせていただきたいと思っております。

まず第一に、1928年、関一（せき・はじめ）大阪市長の時代に本学は大阪商科大学への発展を遂げましたが、そのとき関市長が「大学は都市とともにあり、都市は大学とともにある」という言葉のもとに、ドイツ初の商科大学であるケルン大学をモデルとしたことであります。同大学を源泉とする都市大学、「実学」重視の自治体大学を構想したわけですね。

本学のドイツとの関連の第二は、ゾンバルト文庫の存在です。1929年、ベルリン大学の高名な経済学者であり社会学者でもあるヴェルナー・ゾンバルトの蔵書1万1,000冊余りを本学は購入いたしました。本学の学術情報総合センターの中にある図書館は、我が国の大学の中でも有数の蔵書を誇っておりますが、それは福田文庫と並んでこのゾンバルト文

庫があるおかげです。ゾンバルト文庫は、経済学関係ではいわゆるドイツ歴史学派のものが中心となっております。

また3番目は、ハンブルク大学との交流です。ハンブルク市と大阪市は姉妹都市であるということもありまして、教員、学生ともに相互交流が非常に盛んでありまして、実は私自身もハンブルク大学で在外研究をした経験がございます。本日出席させていただいております副学長の角野先生も、そして今回このシンポジウムを企画された経済学部の山下先生もハンブルク大学での在外研究の経験をお持ちであると聞いております。

今回のシンポジウムのテーマは「アジアの地域統合」であり、その際にヨーロッパの経験を参照しながら、その可能性を探ることが多面的に行われることになるでしょうが、近年我が国でもアジア地域統合に対する関心が高まってきたことでもあり、今回のシンポジウムがこうした問題の論議を深める何らかの契機となることができましたら幸いです。本日も含めましてこのシンポジウムは三日間開催され、多くの論点をめぐって、多くの著名な論者によって討議されます。実り多い成果が得られますことを期待しつつ、ご挨拶に代えさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。